

星一と宮家の交際

三 澤 美 和

星薬科大学 薬理学教室

Association between Hajime Hoshi and Imperial Princes

Miwa MISAWA

Department of Pharmacology, School of Pharmacy, Hoshi University

1. はじめに

星一は、1911（明治44）年星製薬株式会社を創立し、同時に星薬科大学の前身にあたる星製薬株式会社教育部門を設立した。数年を経ずして大正中期には一躍日本一の製薬会社にまで発展させた。1894（明治27）年から1906（明治39）年の12年間にわたり星一は米国コロンビア大学で学ぶかたわら、『日米週報』や英字新聞『Japan and America』を発行して、新聞社を経営した¹⁾。米国滞在中には同郷の後輩野口英世を友とし、新渡戸稲造とも親交を結ぶとともに、国士杉山茂丸の仲介で関係改善のためロシアに赴く途中米国に立ち寄った伊藤博文の臨時私設秘書を務めた。星の一時帰国時には経営している新聞社支援を求めて伊藤や後の外相・内相・逓信相・東京市長後藤新平を訪れている。その後後藤とは終生親交することになる。日本への帰国後、伊藤が韓国統監として彼の地を訪れる際、後の首相・外相広田弘毅とともに随行し、以後広田とも終生交友関係にあった²⁾。星製薬株式会社創立時には明治の元勳後藤象二郎の長男で伯爵の後藤猛太郎（後に映画会社日活を設立）を社の取締役の一人に、相談役には後に三井物産の重役、阪急阪神電鉄の初代社長、近畿日本鉄道社長などを歴任した岩下清周、日本生命社長などで後に商工大臣、大蔵大臣などを務める片岡直温、松方正義首相の長男で神戸の政財界の巨頭であり、後に美術収集において松方コレクションの名で知られる松方幸次郎を就任させている³⁾。明治から戦前にかけて日本の政治・外交の黒幕であった玄洋社の頭山満とも親しく、頭山は広田弘毅とともに何度となく星薬大（その前身）の卒業式等に臨席している²⁾。

そのほか星一の親交した著名人は枚挙に暇ないが、本論文では皇族殿下（宮様）方との交際について研究した結果を報告する。

2. 星一と親交のあった宮様

現在なら信じられないことであるが、星製薬株式会社と星製薬商業学校に1922（大正11）年から1926（大正15）年のあいだに6名もの宮様が訪れている（表1）。

表1 宮様の台臨。各宮様の台臨時年齢と台臨年月日

	台臨時年齢	台臨年月日
・伏見宮博恭親王	46歳	1922（大正11）年5月18日
・朝香宮鳩彦親王	34歳	1922（大正11）年9月20日
	40歳	1928（昭和3）年1月13日
・秩父宮雍仁親王	20歳	1923（大正12）年3月20日
・北白川宮永久親王	15歳	1926（大正15）年1月27日
・竹田宮恒徳親王	16歳	1926（大正15）年1月27日
・李鍵公	16歳	1926（大正15）年1月27日

図1に当時の皇族系譜⁴⁾を載せたが、明治、大正、昭和の各天皇の直系は14世紀に遡る伏見宮邦家である。明治から昭和初頭にかけて存在した宮家は伏見宮邦家の方々である。そのうち星一と親交のあった伏見宮博恭殿下、朝香宮鳩彦殿下、秩父宮雍仁殿下、北白川宮永久殿下、竹田宮恒徳殿下、李鍵公の6名の宮様との交流について以下に述べる。

3. 伏見宮博恭殿下

「本社第一工場並びに星製薬商業学校へ伏見宮博恭王殿下 - ご来臨の光栄 - 」という見出しが星製薬株式会社報（大正11年6月1日号⁵⁾）の紙面を飾っている（写真1）。星一は、1911（明治44）年に星製薬株式会社を設立し、大正初期にモルヒネ、キニーネ、コカイン、アトロピンなどといったアルカロイドを次々とわが国で工業的な製造に初成功し、欧米へ輸出するにいたった。

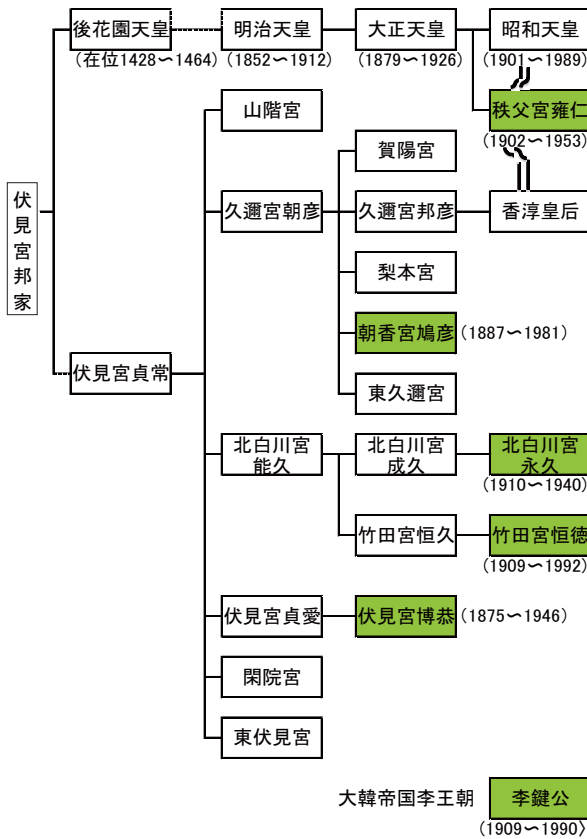


図1 皇族系譜 (明治～昭和中期)



写真1 伏見宮殿下来臨を伝える星製薬株式会社社報記事 (大正11年)

国内では幾多の家庭薬の製造発売も行っており、年々資本金が増額されて1918(大正7)年には日本一の製薬会社に成長している。伏見宮殿下が来訪されたのは、大正11年2月5日に星一が“人をつくる”として東京府荏原郡荏塚村(現在の東京都品川区荏原)に星製薬商業学校を設立²⁾した年である。



写真2 星製薬株式会社に到着された伏見宮殿下(左)。右は星一。

同年5月18日午前9時伏見宮殿下は武官本宿中佐だけを従え、荏原郡大崎町にある星製薬株式会社工場に車でご微行になった⁵⁾(写真2)。牧野伸顕宮内大臣(大久保利通の二男)との打ち合わせも不十分な段階でのその朝突然のご台臨に、星一は宮様の思召しに従い、ありのままの工場の作業風景をご覧になっていた。

殿下は工場第一館から第四館にわたって、説明に耳を傾けながら、細菌部から、火夫が石炭を投げ込む機関室、キナ粉末の飛散するキニーネ工場、女工が薬の包装をしている包装室、各薬品の試験製造作業などを熱心に視察された。屋上に上がって全景をご覧になった後、敷地内にある星幼稚園に寄られ、次いで親切第一稲荷神社に参拝したあと、星製薬商業学校に向かわれた。午前10時半に学校にお着きになり、星一校長、原稜威雄主事のご案内で講堂、講習会講堂、寄宿舎を視察された。折から講義中の和田商学士の「商事要項」、久保慶応大学医学部助教授の「生理解剖衛生一般」の講義も聴聞された。校庭に新築中の記念大講堂(現在の星薬科大学本館)の有様をご覧になった後、午前11時すぎに帰還の途につかれた。

現在見つからないが、伏見宮殿下の台臨の様子の活動写真も撮影されている。

星はその日伏見宮邸にお礼に参上した際、至極質素を好まれ、虚礼をお嫌いになるということ、殿下からありのままの工場と学校が見られて満足しているとお言葉をいただいている。

なお星製薬商業学校の開講日は前述したように大正11年2月5日であるが、殿下のご来校を大変な光栄として、創立記念日は台臨日である5月18日と指定された²⁾。星製薬商業学校はその後、星薬学専門学校、星薬科大学と変遷したが、現在の星薬科大学の創立記念日は引き続き5月18日である。

伏見宮殿下とのお付き合いに関して他に残っている記録としては、後に触れるが、1934(昭和9)年11月に



写真3 伏見宮殿下から星一へのご下賜品
(菊紋入り銀製花瓶一对) (昭和15年)

日本初の国産キナ樹の献上、1938(昭和12年3月)に米国から星一に届いたハナミズキ樹等の宮邸への移植、1940(昭和15)年殿下から星一への菊紋入り銀製花瓶一对(写真3)の下賜⁹⁾といった資料と写真が残っている。

伏見宮博恭殿下の略歴⁹⁾を以下に記載しておく(系譜と生没年は図1参照)。

ドイツ海軍大学校卒業、貴族院議員、徳川慶喜九女の徳川経子と結婚、戦艦三笠分隊長として日露戦争に参加し戦傷を負う、海軍大学校長、海軍大将、元帥。実戦・実務経験豊富な一流の海軍軍人であり、皇族軍人として絶大な権力を振るわれた。伏見宮邸跡地は現在ホテルニューオータニとなっている¹⁰⁾。なお殿下が星製薬と星商校に台臨されたのは46歳の時で、海軍大将に就任された年であった。

4. 朝香宮鳩彦殿下

朝香宮鳩彦殿下は1922(大正11)年9月と1928(昭和3)年1月の二度星製薬株式会社と星製薬商業学校にご来臨されている¹¹⁾。大正11年9月20日午前8時30分、殿下は武官藤岡少佐と折田、稲葉の両宮内事務官を従えて、港区白金台にある宮邸から車で到着された。折しも社長星一は世界一周視察の途についており、米国に滞在中であったため、対応は常務取締役安楽栄治が担当した。伏見宮殿下台臨のときにならって第一工場ならびに星製薬商業学校を案内した。殿下は午前11時帰還された。工場視察の際には工場の規模の広大さ、場内の清潔等についてしばしば賞讃の言葉をかけられ、「世界中に斯くの如く大きな製薬工場があるか」との質

問をされた。安楽常務は「化学工業薬品製造工場にはあるいは大なるものがあると思われませんが、医薬工場としては本社の工場は世界最大のものの一つと確信しております」と答えている。

学校においては、当日たまたま第11回星製薬講習会修業式が挙行中であり、目賀田種太郎男爵(勝海舟の娘逸子と結婚、専修大学創始者の一人)が祝辞を述べているところであった。突然の来臨に修業生は大いに感激している。

この年10月に殿下はフランス留学を控えており、「フランス国パリにおいて星社長に会いたし、その旨伝えおけ。」の言葉を安楽に伝えている。殿下の星への台臨は、欧州視察前に日本における代表的工場を視察しておきたい、とのお考えからであった。

数年後の1928(昭和3)年1月13日朝香宮殿下は再度星製薬工場と星製薬商業学校を訪問されている¹²⁾。1月10日夕刻殿下から宮邸によばれた星一は、ご下問に対して1時間50分にわたって星の現状と苦心の未冷凍製品を含めた種々の発明が行われたことを言上した。殿下は「さらばその発明を見に行かん。」と仰り、訪問となった。13日当日午前9時半に工場にお着きになり、今回は星一自身が工場内を案内した。たまたま来社中の米国星製薬株式会社代理店ウィリアム・ホスケン夫妻と記念写真におさまっている。殿下は前回に来られたときに親切第一稲荷神社にお手植えになった松がのびのびと繁っているのをにこにこ眺められた。工場視察では、多数の発明品を賞讃されるとともに、前回に比べてさらに多数の精巧な機械が完備されていることに満足されていた。

工場視察後、第58回星製薬講習会講習生、第10回再講習生、荏原郡京陽小学校生徒の奉迎の中、星製薬商業学校に到着された。前回は軍服姿であったが、この度は背広を着用されていた。到着後、前回の台臨後に竣工した記念大講堂(現在の本館)をくまなくご覧になり、11時30分に帰還になった(写真4)。同日午後宮家か



写真4 星製薬商業学校を後にされる朝香宮殿下(中央)。その右前は星一(昭和3年)

ら電話があり、星社長に伺候せよとのことで、星一がお礼かたがた宮邸に伺ったところ、金一封（一百円）の下賜金を賜った¹³⁾。「社員従業員のためになるように使用せよ。」とのお話であり、翌日星一は稲荷神社前に社員従業員を集めて殿下の万歳を三唱して殿下のご健康を祈り礼意を表した。その後下賜金を発明奨励に利用することとし、発明募集して当選者には下賜金を分配することにした。

2年後の1930（昭和5）年1月8日にも星一は朝香宮邸に招かれ、星の現状や今後の計画を言上したが、殿下手ずから星一に菊紋入りケースに入ったカフスポタン（写真5）を下賜された¹⁴⁾。星一は殿下が前回来臨されたと同じ1月13日に社員従業員を集めて1月8日に殿下に拝謁し、下賜品を賜った光栄を一同に報告している。朝香宮鳩彦殿下の略歴^{7,9)}を以下に記載しておく。

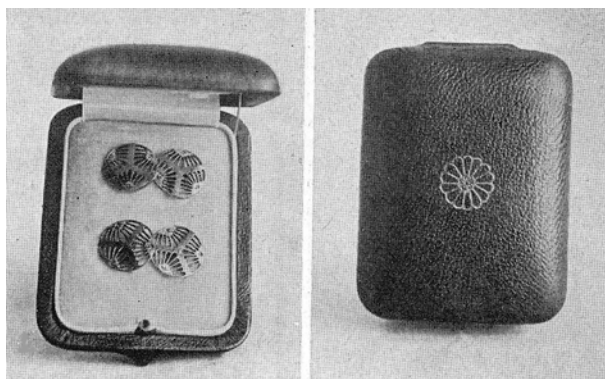


写真5 朝香宮殿下から星一へのご下賜品（カフスポタン）
（昭和5年）

陸軍大学卒業、明治天皇皇女允子と結婚、フランス留学。フランスで自動車事故に遭遇し長期フランス滞在を強いられる。アールデコ文化に強く関心をもち、帰国後そうした様式の宮邸を建てる。陸軍大将、戦後皇籍離脱、日本ゴルフ倶楽部名誉会長など。駒沢にあったゴルフ場を埼玉県に移したその地は現在の朝霞市という名称になっている（殿下に恐れ多いので漢字の一部香を霞に変更して）。白金台宮家本邸は現在東京都庭園美術館となっている¹⁰⁾。なお星一は殿下の名前鳩彦の一字をいただいて昭和4年に誕生した長女に鳩子と命名している。

5. 秩父宮雍仁殿下

1923（大正12）年3月20日、後の昭和天皇の第一弟君である秩父宮雍仁殿下が午前9時30分に竹本武官を従え、背広服に中折れ帽の服装で星製薬工場に台臨された¹⁵⁾。民間の工場への御成りは初めてのことで、星一社長らの案内で細菌部、製剤部、製函部、化粧品部、研究室、アルカロイド工場、ベンゾール抽出室、製氷室、粉末室、包装室等各部をくまなく視察された（写真6）。親切第一稲荷神社を参詣の後、午後零時10分退出にな

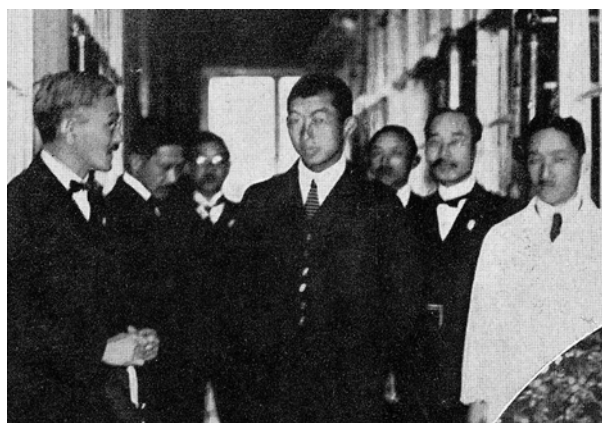


写真6 星製薬株式会社をご訪問中の秩父宮殿下（中央）
（大正12年）。左前は星一

り、星製薬商業学校に向かわれた。各校舎を視察され、講習会の授業をしばらくご覧になられた後、午後1時20分、ご機嫌麗しく帰還された。前後約4時間にわたるご滞在であった。

ご訪問の前にあらかじめ『星社長欧米視察談』に目を通しておられ、台臨視察の折も機械や製品に自ら手を触れられ、大いなる興味をもって、的を得た質問をされて案内していた人々を感激させた。秩父宮は特に理科系の学問に興味をお持ちであったようである。ご退出の際に社員従業員一同に対して金一封を下賜になった。星一がお礼のため青山御所内の秩父宮邸を訪問した際、「視察は善き参考になった。国家のために尽瘁せよ。」とのお言葉を下された。星一は殿下の下賜金で星自助会の設置をした。

星一は大正11年から大正12年にかけて伏見宮、朝香宮、秩父宮各殿下の相次いだ台臨を受けて、深い光栄の念を抱くとともに、「殿下のお心に副い、お喜びさし上げるには、一日も早く世界の大製薬会社となって、世界の人の道のために尽くしたいと思う。」¹⁵⁾と述べている。

1925（大正14）年3月27日には秩父宮殿下が星製薬株式会社の発明した数多くの冷凍製品をご覧になりたいとのことで、星一は会社の大島、豊島両博士らとともに百余種の発明品を携えて青山御所に伺候している¹⁶⁾（写真7）。殿下は応接間で2時間にわたって発明の動機、研究方法等に関して説明を聞かれ、微細な点まで質問された。

同年5月秩父宮殿下が英国に外遊される門出を祝福するため、星製薬で製造した二種の冷凍酒をその前月に献上している¹⁷⁾。宮家はその三分の一を自ら乗船される軍艦出雲に、三分の二を箱崎丸に積み込んで出掛けられている。なお2年間の留学予定は途中大正天皇崩御のため、1年6ヶ月の留学で終わった¹⁸⁾。

秩父宮雍仁殿下の略歴^{7,9,18)}を以下に記載しておく。



写真7 秩父宮殿下に星製薬発明の冷凍製品を台覧いただいた
星製薬株式会社社報記事 (大正14年)

大正天皇第二皇子、陸軍少将。登山、スキー、野球、テニス、クレール射撃、ラグビー、ホッケー、ボートなど多くのスポーツを楽しまれ、スポーツの宮様といわれた。マッターホルン登頂。秩父宮ラグビー場、秩父宮記念スポーツ博物館に名を残す。日英協会・日本瑞典協会総裁。

6. 北白川宮永久殿下、竹田宮恒徳殿下、李鍵公

1926 (大正15)年1月17日午後1時半北白川宮永久殿下、竹田宮恒徳殿下、李鍵公のお三方 (いずれも陸軍幼年学校在学中) がほかの同校生徒148名とともに星製薬本社工場を見学になり、その後星製薬商業学校にお出でになった¹⁹⁾ (写真8)。講堂において他の生徒と一緒に星一社長の謹話を聞かれ、午後4時帰校になっ



写真8 星製薬商業学校をご訪問中の北白川宮殿下 (左)、竹田宮 (中)、李鍵公 (右) (大正15年)

た。陸軍少佐倉石生徒監は星の謹話が非常に有益であったことを伝えている。

各宮様の略歴を以下に記載しておく。

北白川宮永久殿下は陸軍士官学校、陸軍大学校卒業、陸軍砲兵少佐、男爵徳川義恕の娘祥子と結婚。日華事変に出征し、北支蒙疆方面で演習中、軍用機の不時着事故により戦死。

竹田宮恒徳殿下は昭和天皇のいここにあたり、陸軍士官学校卒業後、騎兵科将校として馬術を得意とされた。大本営参謀としてフィリピン攻略、ガダルカナルの戦いに参画。満州国皇帝溥儀とも交流があった。終戦時に昭和天皇特使として満州に赴き、関東軍に停戦の大命を伝え、武装解除を厳命している。戦後、日本体育協会専務理事、日本オリンピック委員会会長、国際オリンピック委員会理事、日本馬術連盟会長、日本スケート連盟会長。東京・札幌両五輪の招致に尽力され、スポーツの宮様といわれた。体育の日の制定にも携われた。芝高輪の宮家本邸の洋館は現在高輪プリンスホテル貴賓館となっている¹⁰⁾。

李鍵公は、李氏朝鮮の王家の一族として韓国併合直前の大韓帝国で生まれた。李王家は日本の皇族に準じて遇された。幼少時に来日し学習院中等科卒業。その後陸軍士官学校、陸軍大学校卒業。陸軍中佐。戦後日本国籍を取得。

7. 宮家へのキナ樹標品とハナミズキ樹の献納

星一と宮家との交流でその後記録が残っているのは、大正年間に星一が購入してあった台湾 (当時日本領) 山地にインドネシアのキナ樹を移植し、1934 (昭和9) 大きく生育していたキナ樹に感激するとともに一部を切ってその標本を秩父宮、伏見宮、朝香宮、竹田宮、北白川宮の各殿下に献納している⁹⁾。星製薬株式会社と星一が種々の困窮に出会った後、星製薬株式会社の再建のために国産初のキニーネ製造に情熱を燃やした頃のことであった。キナ樹標本は昭和天皇にも献上されている。星が国家のために国産キニーネ製造に踏み出そうとして強い気概が読み取れる。

1937 (昭和12)年3月に、米国から届いた白ハナミズキ、アメリカハナズオウ、マルバサンザシ、梅樹ガマズミの苗木をセットで上記5宮邸へ自ら持参して献納している⁶⁾ (写真9)。星一は米国オハイオ州シンシナチ市に桜樹5,000本を寄贈していたが、その返礼として送付されてきたこれらの米国の樹木の苗木を宮家へ持参したものであった。

8. おわりに

星一のつくった星製薬株式会社は大正年間一躍日本一の製薬会社に成長し、先進欧米国各国にキニーネなどの



写真9 宮家へ献納されるキナ樹標品。星一が台湾でキナ樹の生育に初成功したその記念。

アルカロイドを大量輸出するまでになった。工場には世界最先端の装備設備を完備し、外国人技師や日本人博士などを何人も擁して一流の研究を推進していた。上述した如く多数の宮様が星製薬株式会社や星製薬商業学校を相次いで訪問されたのは、星製薬がまさに世界一の製薬会社をめざしていた絶頂期のことであった。当時あって破竹の勢いで世界最先端レベルに匹敵した近代産業を育てた星一と星製薬に宮様方が興味をもたれ、何時間もかけて視察されたことは今の時代からみても驚異的なことである。星一は12年間の滞米生活でアメリカ精神と自由の気風を身につけていたが、天皇や皇族そして国の



写真10 朝香宮邸への米国産ハナミズキ等の苗木献納
(右は朝香宮殿下、その左は星一) (昭和12年)

発展を非常に重んずる面をもっていた。宮様方と星一の間の際が一時的にとどまらず長く続いたのは、星のそうした考え方が宮様方に自ずから伝わったことと、星一人が破格な大きなスケールと繊細な人を思う心を兼ね備えた魅力ある人物であったからに違いない。今回紹介した宮様方との交際の事実は歴史の一コマとして留めおくに十分値することと思われる。

[本稿は薬史学雑誌第43巻95-100頁(2008)²⁰⁾を転載したものである]

参考文献

- 1) 三澤美和：星一の著作を追って，薬史学雑誌，42，137-146（2007）。
- 2) 星薬科大学：星薬科大学八十年史（1991）。
- 3) 星製薬株式会社：社報第1号（大正2年11月1日発行）。
- 4) 児玉幸多：日本史年表・地図，吉川弘文館（2006）。
- 5) 星製薬株式会社：社報第98号（大正11年6月1日発行）。
- 6) 星製薬株式会社：星製薬株式会社創立三十周年記念写真帖（1940）。
- 7) 広岡裕児：皇族，読売新聞社（1998）。
- 8) 菅 春貴：皇族・華族 古写真帖，新人物往来社（2006）。
- 9) 鹿島 茂：宮家の時代，朝日新聞社（2006）。
- 10) 鈴木博之（監）：皇室の邸宅，JTB パブリッシング編集制作本部企画（2006）。
- 11) 星製薬株式会社：社報第102号（大正11年10月1日発行）。
- 12) 同上，第189号（昭和3年2月1日発行）。
- 13) 星製薬株式会社：星の組織と其事業生命延長 ホシの製品
- 14) 同上，第213号（昭和5年2月1日発行）。
- 15) 同上，第108号（大正12年4月1日発行）。
- 16) 同上，第154号（大正14年4月15日発行），星製薬株式会社：社報第102号（大正11年10月1日発行）。
- 17) 同上，第157号（大正14年6月1日発行）。
- 18) 保阪正康：昭和天皇の弟君の生涯 秩父宮，中公文庫（2007）。
- 19) 星製薬株式会社：社報第167号（大正15年2月1日発行）。
- 20) 三澤美和：星一と宮家の交際，薬史学雑誌，43，95-100（2008）。